カケル

vol. 4

萩市

kakeru

ゆめはくカフェ通信

September 2021 **4** Hagi

旅と交流

松浦 弥太郎
（エッセイスト・クリエイティブディレクター）

×

塩満直弘
（萩ゲストハウス ruco）

山口県発達障害児支援
山口ゆめ回廊博覧会
YAMAGUCHI YUME KAIRO EXPO

ゆめはくカフェとは

山口ゆめ回廊博覧会が開催される山口県央連携都市圏域の
７市町をつなぐリレー形式のトークイベントです。
地域ホストはそれぞれのエリアで活躍するキーパーソン、
ゲストは圏域外で活躍するアーティストやクリエイター。
両者が各地域のとっておきの場所を会場に語り合い、
地域の魅力を掘り起こしていきます。
カフェでくつろぐように、楽しいおしゃべりに耳を傾けてください。

そんなイベントの模様を収録した『ゆめはくカフェ通信 kakeru』。
ゲスト × 地域ホストの“かける”と
７市町に七色の虹を“かける”イメージから名付けました。
トークとともに、その土地の持ち味を存分にお届けします。

山口ゆめ回廊博覧会　2021年７月～12月

山口県央連携都市圏域（山口市、宇部市、萩市、防府市、美祢市、山陽小野田市、島根県津和野町）で開催する、地域の特徴をいかした周遊型博覧会です。愛称は『ゆめはく』。特別な場所で体験するアートと食のコラボレーションや、普段は見ることができない場所を案内するスペシャルなまち歩きなど、「いま・ここ」でしか体験できないゆめはくに参加しよう！

公式Webサイト　https://yumehaku.jp

田床山から望む萩市街

萩ゲストハウス ruco（1F）

土地のちからは
時代を超える。
「何もない」から
「何かある」へ
価値観を変えられたら。

ゆめはくカフェ　vol. 4

「旅と交流」

2021年6月19日　萩ゲストハウス ruco（萩市）

今回のゲストは「旅は1人になる贅沢」と語る松浦 弥太郎さん。
地域ホストは山口県初のゲストハウスを開いた塩満直弘さん。
コロナ禍のため、松浦さんの萩への来訪は叶いませんでしたが、
各人が考える旅の魅力や旅のスタイル、訪れた土地の味わい方から
浮かび上がってきた「交流」をめぐる4人のオンライントーク。
自由に旅することが難しいいまこそ、じっくりとお楽しみください。

YUMEHAKU-CAFE vol. 4 Hagi

松浦 弥太郎

（エッセイスト・クリエイティブディレクター）

×

塩満直弘

（萩ゲストハウス ruco）

ゲスト

松浦 弥太郎　Matsuura Yataro

1965年東京都生まれ。エッセイスト、クリエイティブディレクター。アメリカ書店文化に触れ、エムアンドカンパニーブックセラーズをスタート。2003年にセレクトブック書店「COWBOOKS」を中目黒にオープン。2005年から『暮しの手帖』の編集長を9年間務め、その後、ウェブメディア「くらしのきほん」を立ちあげる。（株）おいしい健康・共同CEO。さまざまな企業の顧問としても活躍。「今日もていねいに」、「考え方のコツ」、「100の基本」ほか、著書多数。

地域ホスト

塩満直弘　Shiomitsu Naohiro

1984年萩市生まれ。カナダ、アメリカ、神奈川を経て、萩市へUターン。『萩ゲストハウス ruco』を2013年に開業。2020年8月には、JR西日本とタイアップして、山陰本線沿いの阿川駅をリユースしたカフェスタンド『Agawa』をオープン。
https://guesthouse-ruco.com

かつて楽器屋だった4階建てのビルをリノベーションしたゲストハウス『ruco』。萩バスセンターから徒歩1分と便利な立地にある。観光地や飲食店へのアクセスがよいのも魅力

旅人と萩の日常をつなぐ ゲストハウスの存在

――BEPPU PROJECTの山出です。今回は、エッセイストやクリエイティブディレクターなど多岐に渡り活躍されている松浦 弥太郎さんをゲストに迎え、地域ホストに『萩ゲストハウス ruco』の塩満直弘さん、『山口ゆめ回廊博覧会』クリエイティブディレクターの服部滋樹さんを加えた4人で、「旅と交流」をテーマにトークを進めていきたいと思います。最初に、塩満さんが萩にゲストハウスをオープンしようと思われたきっかけをお聞かせいただけますか？

塩満　20歳のとき、ワーキングホリデーを活用してカナダに留学したことがきっかけです。それまでの自分は、どこか無気力で、目標を見いだせないままに日々を過ごしていました。でも、カナダの語学学校で働いていたとき、入学してきた初対面の女性から「SHIOと話すといいよといわれたの。みんな、あなたのことが好きみたい」と声をかけられたことで、初めてそのままの自分を肯定してもらえたような気がしました。その日を境に、地元のサッカーチームに入ったり、映画撮影のエキストラのアルバイトを経験したりと、自分がやりたいと思ったことに対して、積極的に行動を起こすようになりました。

――人との出会いが塩満さんの生き方を変える大きな転機となったのですね。

塩満　その後、ニューヨークでも1年近く暮らしました。そこには、ダンサーや俳優など、夢や目標をもった人たちがたくさん集まっていて、刺激に満ちあふれていました。さまざまなバックグラウンドやカルチャーを持つ人々と触れあううちに、「自分が能動的に動くことで、周囲の環境は変えていけるし、もっと楽しくできる」という思考に変わっていきました。

また、海外での生活を経験したことで、改めて、情緒ある萩の町並みやそこで生活する人々の暮らしが特別で素晴らしいものだと感じられるようになりました。そして、故郷であり、自分にとって大切な存在でもある「萩で何かをしたい」という感情が沸々と湧いてきました。

――その後、ゲストハウスをオープンするまでの道のりはどのような感じだったのですか？

塩満　萩で何かを始めたいという思いを抱いて帰国したものの、当時はまだ、具体的な構想は思い浮かんでいませんでした。ただ、漠然と、人と対峙する仕事をしたいとは思っていました。それを形にするために、萩で何をすればいいのだろう…。思いをめぐらせた結果、人と人とのつながりを生みながら、自分自身も多様な人々と出会う機会をつくることができる「ゲストハウス」という選択肢が見えてきました。そこでまず、小規模な宿泊施設の運営ノウハウを学ぶために、鎌倉のデザイナーズ旅館で働きました。そして、27歳のときに萩にUターンして、ゲストハウスの開業準備に取りかかりました。

でも、数カ月経っても希望に合った物件は見つかりませんでした。そんなとき、昔お世話になっていた居酒屋のオーナーから、「空き店舗を活用してお店をやってみたらいいんじゃないか」と声かけていただきました。そこで、バーを経営しながら、ゲストハウスの物件を探すことにしました。バーに来られたお客さんに「萩でこんなことをしたいんです！」とイメージを語り続けることで応援者が増え、ようやく現在の建物にめぐり合うことができました。そして2013年に、山口県初となるゲストハウスをオープンしました。

――時間をかけて辿り着いた答えが、ゲストハウスだったのですね。

塩満　回り道をしたように見えるかもしれませんが、いまの自分にたどり着くためには、どれも必要な経験だったと思います。

客室は、洋室、和室、男女混合ドミトリーの3タイプ

このゲストハウスを、萩の市街地を縦横無尽に流れる水路のように、訪れる人と萩の日常とをつないでいくような場所にしたい。そんな思いを込めて「流」と「交」を合わせて『ruco』と名付けました。かつての自分が救われたように、この場所を通じて、誰かの存在を認め続けていきたいと思っています。

本を1冊味わうように 気軽に旅をする

――ここからはゲストの松浦さんにも参加していただきたいと思います。旅と聞いてイメージするものは何ですか？

松浦　僕は幼いころから「早く大きくなって旅に出たい」という憧れがありました。当時の私にとっては、犬の散歩を理由に、校区外のエリアに足を踏み入れたり、大きな通りや橋を渡ったりと、行ったことのない場所で新しいことを発見することが旅でした。大人になったいまでも、その感覚はずっと変わらずに持ち続けています。

自分が知らないものに触れる喜び、いつもとは違う時間を過ごすわくわく感を味わえるという意味では、読書と旅は似ていると思います。旅を特別なものと考えるのでなく、1冊の本を読むような感覚でとらえると、もっと身近なものとして感じられるのではないでしょうか。僕にとっての旅は、ささやかな贅沢という感じです。

服部　僕は旅に出かけることで、新たな自分に出会えるような気がします。夏休みが終わって学校に行くと、急に大人っぽく見えた子どもがいましたよね。旅を経験した人はどこか成長しているような感じがして、子どもながらに羨ましかったのを覚えています。

現地の人との交流は旅の醍醐味の1つ

——旅にどんなことを求めますか？

松浦　僕の場合は１人の時間をつくりたいというのが、旅に出かける最大の動機です。ただし、旅先で出会った人と仲良くなって、しばらく一緒に行動を共にするのはとても好きです。現地で出会った人と交流することで、旅は何倍にも楽しくなると思います。

塩満　ガイドブックには頼らず、自分の感覚に従って、旅先での偶然性を楽しむようにしている。２階のカフェ＆ラウンジは、日帰り客も地元の人も気軽に利用できる居心地のよい空間。階段の壁面には、萩焼の陶板や萩ガラス、染め物などの萩の文化が、スタイリッシュに表現されている。３、４階は宿泊スペース

類の歩くスピードは、何千年前からほぼ変わっていない。我々は過去の人々の追体験をしながらこの景色を歩いている」といったのを強烈に覚えています。歩くスピードだからこそ感じられるものが絶対にあると思います。

松浦　歩きながらそれぞれの町の歴史を１つひとつ紐解いていくことは、いまを生きる私たちに残された楽しみだともいえます。旅は、過去の人々との交流といってもいいのかもしれません。僕は静かな町を旅するのが好きなので、交通アクセスの不便な場所、簡単には行けない場所をあえて旅先に選ぶことが多いです。萩はまさにそんな場所だと思います。まだ訪れたことはありませんが、たどり着くまでの時間も含めて、萩への旅はきっと楽しいものになるだろうと想像しています。

——旅先での楽しみ方を教えてください。

松浦　まずは、その土地が一望できる高い場所に行きます。そこから町の全体像と地形を確認して、気になったところを散策します。そうすることで、自分の興味や好奇心に沿ったオリジナルの旅を楽しむことができます。

塩満　萩だと田床山から町を一望することができます。川に囲まれた三角州のなかに、町がコンパクトにまとまっている様子がよくわかります。そこに、武家屋敷や商家、白壁やなまこ壁などの城下町らしい町並みと美しい自然とが調和している。いまでも江戸時代の地図が使えるくらい、古い町並みがそのまま残されています。

松浦　萩は城下町として栄えたきらびやかな歴史から、文化の地ならしがされているように思います。それ故に、古いものを残し、守っていくという文化が根付いているように感じます。塩満さんのように、一度そこを離れても、もう一度帰りたいと思わせる土地の力のようなものがあるのではないでしょうか。それは、時代が過ぎても失われないような気がします。

塩満　松浦さんには萩の歴史と人々の日常とをセットでご案内したいです。個人的に好きなのは菊ヶ浜。ここは萩市民の原風景ともいえる場所です。僕もしょっちゅう訪れて、景色を眺めてのんびり過ごしたり、海に浮かんでリラックスしたりしています。そのほかにも、日本人なら誰もが懐かしいと感じるような風景が、徒歩圏内にたくさん残されているので、ぜひ一緒に歩きながら萩の魅力をお伝えしたいです。

服部　僕の友達が、「二足歩行で歩いている人

1. なまこ壁や白壁などの風情ある町並みが続く城下町エリア／2. 夏には多くの海水浴客で賑わう菊ヶ浜。奥に見えるのは指月山／3. 指月山のふもとに築城された萩城。現在は天守台の石垣だけが残る

ます。できるだけそこに住んでいる人の生活に触れたいので、食事をする店を選ぶときは、地元の人に「あなたが肩肘張らずに日常的に行かれるお店を教えてください」と聞くようにしています。

服部　僕もバックパッカーをしていたころ、敢えてその土地の人しか行かないような路地裏の食堂に入り、地元の人が食べているものを真似してオーダーしていました。早くその土地の日常に浸りたいという気持ちが強かったです。

松浦　塩満さんと同じで能動的な旅が好きなので、基本的にガイドブックは使いません。最初からさまざまな情報をインプットして行くよりも、現地で集める方が、より一層、旅を楽しめると思うからです。

さらにいえば、2度、3度と訪れたいです。友達のように、長年つきあうことで「まだこんなに面白い側面があったのか！」と感じられて、その土地のことがどんどん好きになっていくと思います。だから、最低でも1週間、欲をいえば1カ月くらいはそこに滞在したいです。

塩満　僕も松浦さんのお話にとても共感を覚えます。萩には1度訪れただけでは探りきれない魅力がたっぷりと詰まっているので、ぜひ長期的に滞在していただきたいです。

能動的な旅というと、ハードルが高く聞こえるかもしれませんが、すれ違う人と目と目を合わせてあいさつを交わすだけでも、旅がもっと楽しくなるのではないでしょうか。旅先での出会いや関わりを大切にすることで、そこから何か新しい発見につながるかもしれません。

――人々との交流が旅の醍醐味といえますね。

塩満　萩といえば、明治維新などに関連した歴史的な側面ばかりが注目されがちですが、それは萩の魅力の一部でしかありません。実際に町を歩くことで、ガイドブックだけではわからない、自分なりの魅力を感じてもらえたらと思います。その魅力に触れる1番の近道は、土地に住んでいる人と対話するなど、何かしら関わってみることだと思います。そういった想いの一端から、ゲストハウスの1階にはカフェを設けています。ここで、地元の人同士や、旅行者と地域の人とのさまざまな交流が生まれることを期待しています。

松浦　僕は旅先で必ずすることが2つあります。1つは、人々が寝静まっている早朝や深夜の町を歩くことです。「こんな時間でも働いている人がいる」とか、「朝ご飯を作っている音がする」とか、しんと静まり返った町のなかに人々の暮らしを感じられるとうれしくなります。

もう1つは、現地で手描きの地図を作ることです。これは子どものころから続けている習慣です。泊まっている宿を中心に、そこからつながっている道を描いて、どこで誰と会って何をしたのか、その土地で体験した情報を全て盛り込みます。完成した地図は、自分が旅した町と仲良くなれた証。これを作ることで特別な旅になる。僕なりの町とのコミュニケーションの仕方ともいえます。楽しいのでみなさんもぜひ挑戦してみてください。

山陰地域の魅力を発信
交流から広がる可能性

――萩にrucoがオープンしてもうすぐ8年。町全体の印象が変わったと聞きます。

塩満　どの地域においても新しい価値観を受け入れるのはなかなか難しいことだと思います。rucoも開業当時は「成立するはずがない」といわれたこともありました。でも、最近は、「rucoができてから萩の潮目が変わってきたと思う」と、地元の方から声をかけていただくこともあります。新しい価値観を理解し、応援してくださっている方とお話する機会も増えてきて、とてもうれしく思っています。また、「rucoのような場所が存在する町なら、新しいことをやっても受け入れてもらえるかもしれない」と、前向きなイメージを持って事業をスタートする方も増えています。rucoに泊まったことで、地元の人々との関係性が生まれて、萩に移住された方もいらっしゃいます。ここができたことで、人々の意識に少しでも影響を与えることができたのであればうれしいです。

――地域の固定概念に風穴をあけるためには、起爆剤として新しいスポットが必要だと思われますか？

塩満　必ずしも必要だとは思いませんが、風通しよく、フラットな立ち位置で、多様な人々の居場所になれるような場所があれば、より地域に自然に溶け込みやすくなったり、ほんの少しの支えになれたりするのではないでしょうか。

松浦弥太郎さん直筆の地図。所々に旅先で感じた気づきが書き込まれている

そういう場所がきっかけとなり、人と人とがつながったり、そこに存在する理由になったりするといいなと思います。あとはどの地方にもいえることですが、「何もない」「この場所じゃ無理」と、行動や思考を放棄したような雰囲気を感じることがあります。でも、人それぞれの見方や感じ方によって物事の価値は大きく変わるし、やる人が変われば結果も変わります。これからも萩に住みながら「自分次第でもっと楽しくできる」という前向きな提案を続けていきたいと思っています。

塩満さんがJR西日本・山陰本線阿川駅の駅舎新設とともにプロデュースした『Agawa』。飲食や物販、レンタサイクルを通じて、山陰地域の魅力を発信するスポットに生まれ変わった

――その1つが2020年8月にオープンした『Agawa』ですよね。どうして阿川駅にスポットを当てて、新しい駅舎と店舗をプロデュースされたのですか？

塩満　萩市を拠点にさまざまな活動を続けるなかで、これからは境界のない地域の在り方や活動が求められるようになっていくのではと考えるようになっていきました。そんなとき、友人の案内で訪れたのが阿川駅でした。山陰本線沿いのJR阿川駅は、萩から車で1時間くらいの場所にある無人駅です。初めて訪れたとき、愛らしい駅舎に少し色褪せた赤色の汽車が入ってくる様子や、何ともいえない郷愁が漂う雰囲気に、一瞬で心を奪われてしまいました。すぐに「この景色をもっと多くの人と共有できないだろうか」「駅という素地をいかしながら、その地域を感じてもらえるような在り方を再編集することで、新たな価値を生みだせるかもしれない」という考えが頭をよぎりました。それからわずか1週間後、JR西日本・地域共生室の方々との出会いに恵まれて、老朽化していた駅待合室の新設にあわせて、駅のそばに店舗を併設して1つの場所として展開させるプロジェクトがスタートしました。

新設した『Agawa』は、駅を中心に人々の活動が集まる広場のような場所です。駅周辺や山陰本線沿線の食材を使った軽食が楽しめるカフェ、地元のお土産品を販売するショップ、レンタサイクルなど、土地の魅力を体感できるコンテンツを用意しています。以前の阿川駅の乗降客数は1日30～50名程度でしたが、Agawaがオープンしてからは100～200名と大幅に増えています。

松浦　いまのお話を聞いて、塩満さんの活動にさらに興味が湧いてきました。直接お会いして、もっといろいろなお話を聞いてみたいですね。

――地域を超えた取り組みに新たな可能性を感じます。今後、塩満さんが発信していきたいことはありますか？

塩満　コロナ禍により、個人の在り方がさらに問われる時代になってきたと思います。「行政がやってくれない」「この環境じゃダメだ」と誰かのせいにするのはナンセンス。自分たちでいまあるものの価値を見定めて、胸を張ってそれを再定義することが重要になってくるのではないでしょうか。自らが発信し行動することで、新しいことに挑戦したいと考えている人の背中を押せる存在でありたい。やりたいことはまだたくさんあります。

――人との関係性が広がったり、多様な価値観に触れて人生が変わったりと、旅することの素晴らしさを感じるトークイベントでした。お2人から今後も目が離せません。本日はパネリストのみなさん、ありがとうございました！

今回もオンラインでの開催となった『ゆめはくカフェ』。旅先での個性的な楽しみ方や、地元の人と旅行者との交流から生まれる可能性など、新たな発見に満ちたひとときとなった

◎萩ゲストハウス ruco
〒758-0044 山口県萩市唐樋町92
アクセス：萩バスセンターから徒歩5分
https://guesthouse-ruco.com

進行役

山出淳也　Yamaide Junya

1970年生まれ。NPO法人BEPPU PROJECT代表理事、アーティスト。文化庁在外研修員としてパリに滞在（2002～04年）。アーティストとして国際的に活躍した後、2005年にBEPPU PROJECTを立ち上げ現在に至る。混浴温泉世界実行委員会 総合プロデューサー（2009年～）、第33回国民文化祭・おおいた 市町村事業 アドバイザー、文化庁審議会 文化政策部会 委員（第14期～16期）、グッドデザイン賞 審査委員（2019年～）、山口ゆめ回廊博覧会コンダクター（2019年～）・平成20年度 芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞（芸術振興部門）。

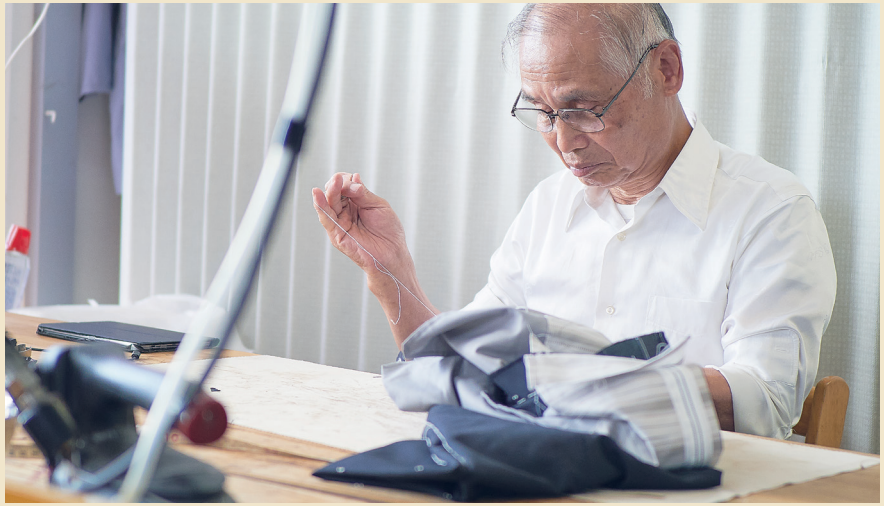
聞き手

服部滋樹　Hattori Shigeki

1970年生まれ、大阪府出身。京都芸術大学芸術学部教授、クリエイティブユニットgraf代表、クリエイティブディレクター、デザイナー。建築、インテリア、プロダクトに関わるデザインや、ブランディングディレクションなどを手がける。デザインリサーチからコンセプトを抽出し、地域や社会基盤もその領域として捉え、仕組みの再構成と豊かな関係性を生み出すコミュニケーションをものづくりからデザインする。プロジェクトからプログラムへ、ムーブメントからカルチャーへ育むデザインを目指している。

わたしのオススメ

塩満直弘
（萩ゲストハウス ruco）



スポット

紳士服 宮木

紳士服 宮木
萩市椿東上野1099-2　Tel. 0838-22-2824
[営業時間]9:00～18:00
[定休日]日曜日

松陰神社の近くにあるテーラー。初めて利用したのは、いまからおよそ10年前。両親に勧められたことがきっかけでした。宮木さんのとても優しくてフランクな人柄に惹かれて、それからずっと利用させてもらっています。サッカーをやっていた影響で、腰回りや太ももががっしりしていて、既成のパンツが合いません。だから、いつも自分好みのサイズに手直しをお願いしています。いつか特別な日のために、宮木さんにオーダースーツを仕立ててもらうのが夢です。

グルメ

どんどん 土原店

海で泳いだ後、学割うどんを食べるのが夏休みの定番でした。今でも２週間に１度は通っています。イチ押しは『たなかうどん』。スタッフの田中さんが、肉とわかめのトッピングが好きだったことに由来するというストーリーも含めて愛着があります。萩市以外の店舗では『肉わかめうどん』として販売中。ネギは大盛り、唐辛子は２杯にするのがいつもの食べ方です。

どんどん 土原店
萩市土原 377　Tel. 0838-22-7537
[営業時間]9:00～21:00
[定休日]無休

グルメ

椙八（すぎはち）商店　釜揚げシラス

実家の冷蔵庫に必ず入っているといってもいい椙八商店さんの釜揚げシラス。とれたてのシラスを素早く無添加ボイルしているから鮮度抜群。全く臭みがありません。しょうゆやぽん酢を少し垂らしたり、温かいご飯にのせたりして食べています。なかでも大好物は、大根おろしと和えたもの。さっぱりとしているので、食欲がないときにもおすすめです。

椙八商店
萩市椿東6397　Tel. 0838-25-0253
[営業時間]8:30～17:00
[定休日]日曜日

ゆめはくカフェのご案内

ゆめはくカフェ YUMEHAKU・CAFE

配布中！ kakeru vol.1

1 山口市

「芸術文化のコミュニティ・派生するサロン」

2021年５月15日（土）　会場：阿東文庫（オンライン配信）

室町時代の大内文化を受け継ぎ、今も芸術・文化が盛んな山口市。市内に数多くある芸術・文化に関連した施設やコミュニティの活動を知り、それぞれの役割や関係性、今後の連携について考える。

藤 浩志（美術家・秋田市文化創造館館長）
×
明日香 健輔（阿東文庫）・渡邉朋也（YCAM）

配布中！ kakeru vol.2

2 山陽小野田市

「産業と暮らしの嗜み方」

2021年５月23日（日）　会場：きららガラス未来館（オンライン配信）

日本の夕陽百選にも選ばれた焼野海岸や見事な地層や岩場が見られる本山岬公園、九州・四国までも望める竜王山公園など、美しい景観に恵まれた山陽小野田市。この地に移住し活動を続けるガラス造形作家と気鋭の建築家が、地域の産業とそこに暮らす魅力を語らう。

藤原徹平（建築家）
×
池本美和（ガラス造形作家）

配布中！ kakeru vol.3

3 美祢市

「楽しみを発掘する」

2021年６月12日（土）
会場：秋吉台ゲストハウス TRIP BASE COCONEEL（オンライン配信）

広大なカルスト大地や鍾乳洞などを資源とした観光が盛んな美祢市。「誰もが３億年の旅をしたくなる」をコンセプトに、原付バイクの貸し出し、ケイビングツアーといったアクティビティを提供するゲストハウス＆カフェバブ TRIP BASE COCONEELを事例に、地域の楽しみ方の発掘・創出について語り合う。

梅原 真（デザイナー）
×
松田寛之（秋吉台ゲストハウス TRIP BASE COCONEEL）

配布中！ kakeru vol.4

4 萩市

「旅と交流」

2021年６月19日（土）　会場：萩ゲストハウス ruco（オンライン配信）

江戸時代の地図がそのまま使える城下町・萩市のゲストハウス ruco。宿泊客にはリピーターも多く、萩が気に入って移住してくる人もいるというrucoの事例から、人との交流や旅をすることで生まれるものについて話す。

松浦 弥太郎（エッセイスト・クリエイティブディレクター）
×
塩満直弘（萩ゲストハウス ruco）

掲載誌 kakeru vol.5

5 防府市

「発酵・日々たべること」

2021年６月26日（土）　会場：お茶室 芳松庵（防府天満宮内）

毎日の食卓に欠かせない醤油や味噌などの醸造業が盛んな防府市。家で過ごす時間が増え、日常の何気ないことがかけがえのないことになった今、食にまつわるあれこれをテーマにトークする。

高山なおみ（料理家・文筆家）
×
光浦 健太郎（光浦醸造）

掲載誌 kakeru vol.6

6 津和野町

「医食同源」

2021年７月10日（土）　会場：糧（医食の学び舎 旧畑迫病院内）

会場は、津和野町の国指定名勝旧堀氏庭園の一部として文化財指定された、旧畑迫病院で運営される医食同源をコンセプトとした場。津和野の暮らしや医食同源を体現して見えてきたもの、これから目指すものをテーマに語る。

稲葉俊郎（医師・医学博士）
×
大江健太（糧）

掲載誌 kakeru vol.7

7 宇部市

「伝統から紐づく暮らし」

2021年７月18日（日）　会場：igual coffee（永山本家酒造場 2F）

自然と産業がバランスよく混在する宇部市。そこで明治から続く永山本家酒造場が大切にしてきたものや地域との関わりを知るとともに、遺したい伝統や景観、受け継がれていく産業と生活、そこに住む人たちの幸せについて考える。

田中元子（株式会社グランドレベル代表取締役社長・喫茶ランドリーオーナー）
×
永山貴博（永山本家酒造場）

次号予告

kakeru vol.5は2021年９月23日の発行です。
「発酵・日々たべること」　高山なおみ（料理家・文筆家）× 光浦 健太郎（光浦醸造）

ゆめはくカフェ通信『kakeru』は公式Webサイトからダウンロード可能です ▶ https://yumehaku.jp

山口ゆめ回廊博覧会　PICK EVENTS

萩市
Hagi

ゆめはくでは地域の特徴をいかしたイベントがもりだくさん！
特別な場所で体験するアートと食の夢のコラボレーションや、
普段は見ることができない場所を案内するスペシャルなまち歩きなど、
ゆめはくで「いま・ここ」でしか体験できないイベントをお楽しみください。

世界遺産の萩城下町を着物でまち歩き
着物ウィーク in 萩 2021

10月1日(金)―10日(日)［予定］　10:00―17:00
萩・明倫学舎、萩城城下町
事前申し込みあり(1日20名程度)／着物レンタル: 4,000円

世界遺産に登録された江戸時代の町並みが残る風情ある萩城城下町を会場に開催。
着物が似合う美しい町並みの散策や、和の体験プログラムなどを楽しむイベントです。

［お問い合わせ］着物ウィーク in 萩実行委員会(一般社団法人 萩市観光協会内)
Tel. 0838-25-1750　E-mail: info@hagishi.com

竹の灯籠で照らされた夜の城下町が幻想的

世界遺産・萩城下町「萩・竹灯路物語」

10月8日(金)―10日(日)［予定］　18:00―21:00　萩城城下町　参加費無料

萩博物館から城下町周辺にかけての総延長約1km強の通りに竹灯籠が立ち並びます。
竹の中で揺れる炎で江戸情緒あふれる歴史の町並みがぼんやり照らし出され、趣たっぷりの夜が楽しめます。

世界遺産松下村塾での特別講話を体感

上田名誉宮司又は白上宮司によるプレミアムな松陰神社ツアー

9月14日(火)、10月12日(火)、11月9日(火)、12月14日(火)
各日とも13:30―15:00　集合場所: 松陰神社大鳥居前
参加費: 5,500円(消費税含む)／2週間前までに要予約(定員2～15名) ※キャンセル料あり

長州藩の幕末の志士、吉田松陰を祀った松陰神社をご案内。明治維新で活躍した多くの逸材を育てた
吉田松陰が主宰した、普段は上がることのできない世界遺産・松下村塾に実際に上がり、
松陰神社の上田名誉宮司又は白上宮司の講話を受講するプレミアムな経験を。

［お問い合わせ］一般社団法人 萩市観光協会　Tel. 0838-25-1750　E-mail: info@hagishi.com

その他のイベントはこちら

公式 Web サイト
https://yumehaku.jp

［新型コロナウイルス感染予防対策実施について］各種イベントは新型コロナウイルス感染症への対策を十分に施したうえで実施します。
また、状況に応じて随時イベントの開催可否・内容変更を検討し、変更した内容は公式 Web サイトでご案内いたします。

YUMEHAKU-CAFE vol.4 Hagi

kakeru
ゆめはくカフェ通信

カケル　vol.4　Hagi　2021年9月1日発行

発行元: 山口ゆめ回廊博覧会実行委員会事務局(山口市交流創造部山口ゆめ回廊博覧会推進室内)
〒753-8650 山口市亀山町2-1　Tel. 083-934-4152
企画: 特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT　制作: 株式会社 野村デザイン制作室
編集: 廣石正樹(be:spoke)　アートディレクション＆デザイン: 野村勝久　ライター: 小野理枝
撮影: 江本 悟(SARUTO Inc.)　コピーライター: 大賀郁子　デザイン: 岡田一星
イラストレーション: 山内庸資　印刷: 大村印刷株式会社